



排卵誘発剤について

目的

- 多嚢胞性卵巣症候群（別紙参照）
- 卵胞の成長を促す
- 月経周期を短縮し、年間の排卵回数を増やす
- 排卵する卵の数を増やし、妊娠の確率を上げる
- その他

排卵誘発剤には**内服薬**と**注射**があります。

月経中にエコーで卵巣の状態を確認してから使用します。

内服薬

（クロミッド、セキソビットなど）

脳に作用し、卵を発育させるホルモンを放出させる作用があります。月経5日目から内服するのが一般的です。副作用として、頭痛、発疹、帯下の量や月経量が減る（子宮内膜が薄くなる）ことがあります。社会生活を脅かすことは殆どありません。薬の使用期間や体質により、副作用の発現頻度も変わってきますので、状態を確認しながら使用を検討していきます。また、他にはアロマターゼ阻害薬（フェマララ、レトロゾールなど）といった排卵誘発作用を有した薬剤も積極的に用いています。

注射

（FSH、HMGなど）

直接卵巣を刺激し、卵の発育を促します。内服薬の効果がない、または弱い場合に使用します。副作用として、倦怠感、頭痛などがあります。帯下の量や月経量が減るといった副作用はありません。ホルモンの状況により通院回数を減らす自己注射のご用意もあります。

副作用

アレルギーなどの一般的な副作用の他、最も注意しなければいけないのが**多胎**と**卵巣過剰刺激症候群（OHSS）**です。

多胎

ヒトは本来1つの卵しか発育しない仕組みになっています。排卵誘発剤を用いると反応が強く出て、多くの卵を発育、排卵させてしまうことがあります。双胎妊娠の可能性が内服薬では5～7%、注射で11～17%と言われています。

卵巣過剰刺激症候群（OHSS）

多くの卵が発育するという事は女性ホルモン値も高くなります。女性ホルモン値が高くなり過ぎると、排卵後、お腹に水が溜まったり、卵が多くできることで卵巣が腫れ、腹痛を起こしたり、血流が悪くなったり（血栓）という症状がみられることがあります。このような症状が悪化すると入院が必要となる場合もあります。

月経周期によっても作用の強さが違うことがあります。（前回は卵が1個だったが、今回は3個できてしまうなど）状態を確認しながら使用を検討していきます。

ご不明な点がございましたら、医師にご相談ください。